

虫刺されに注意



[特集]虫刺され対策

夏のいや～な風物詩

夏の生き物 警戒したい

いろんなレジャー解禁となり、海や山などいたるところで賑わいを見せる夏。そんな開放的なムードがただよう夏ですが、一方でゲリラ豪雨や落雷、熱中症など自然の脅威による被害も毎年のように深刻化しています。そんな中、意外と忘れられているのが虫被害。死に至るケースもあるなど、決してあなどれないリスクです。しっかりと対策を行い、夏を楽しく安全に過ごしましょう。

海水浴やバーベキュー、プールにビアガーデンなど、何かと楽しみが増えるこれからの季節。どこに出かけようかと、色々計画されている方も多いのでは？しかし行く先々で、そんな楽しい気分をジャマする天敵、蚊やハチといった存在も忘れてはいけません。

今回は、そんな夏に注意したい生き物と、その予防、対策をご紹介します。自然豊かな行楽地だけでなく、日常の生活圏でも十分被害にあう可能性があるため、リスクを認識し、万が一刺されても、しっかりと対応できるように準備しておきましょう。

夏場の虫の代表格、蚊

一昨年、約70年ぶりに国内で発生したデング熱をはじめ、オリンピックの開催地ブラジルでのジカ熱など、蚊が媒介する感染症は世界各地で問題となっています。

日本では古くから日本脳炎が問題で、今でも注意が必要です。日本脳炎ウイルスをもつ蚊に刺された場合、発症リスクは1000人に1人程度ですが、発症すると亡くなられたり後遺症が残るケースも多く注意が必要です。

蚊は、昼間は屋外。夜は屋内にも侵入し、血を吸う傾向があります。ただ痒みをもたらすだけでなく、こうしたリスクの高い病気を広めるので、

蚊は二酸化炭素を探知し、さらに温かいものに寄ってくるという習性があります。そのため、体温の高い人、運動直後の人、妊娠中の人、飲酒のあとなどは、刺されやすいので、特に注意が必要です。

こんな人は注意が必要

昼夜問わずしっかりと対策を講じましょう。

夏になると凶暴化するハチ

ハチ毒やアナフィラキシーショックなど、死に至るケースもあるハチ被害。特に夏から秋にかけては巣作りの最盛期を迎えるため、より神経質となったハチが襲ってくるというケースが増加します。

刺激しない、巣に近づかない

襲われるリスクを軽減するには、とにかく刺激しないこと、巣に近づかないことが一番。次のような行動が見られる時は、巣が近い可能性が高いので特に注意してください。

■空に向かって斜めに飛んでいる。
■上空を大きく旋回している。

もし刺されてしまったら？

最もこわいのがアナフィラキシーショックです。アナフィラキシーショックは、とにかく時間との勝負。

虫除け対策のポイントです☆



早い場合は10分位で窒息します。次のような症状が見られる場合は、アナフィラキシーショックの可能性が高いので、大至急、救急車を呼んで医療機関を受診してください。

1	呼吸器系	せき、くしゃみ、呼吸困難など
2	循環器系	動悸、脈拍の変化、血圧低下など
3	消化器系	吐き気や腹痛
4	神経系	意識障害、めまい、しびれなど
5	皮膚系	蕁麻疹、腫れ、かゆみなど
6	全身	無力感、不安感など

これらの症状は、あらわれる時間が短いほど危険。また、過去にショックを起こされた方は、特に注意が必要です。特効薬のエピベンを医療機関で講習を受けて処方してもらうことができます。出かけるときはエpiベンを持ち歩きましょう。

刺された時の応急処置

まずは患部を流水で洗い流し、毒液を体外へ排出(患部に針が残っている場合があるので、適切に抜き取る必要があります)。体外へ排出する際は、患部をつまんで血とともに毒液を絞り出すのが効果的です。その後、患部を冷やし毒のまわりを遅く

します。

ムカデにも要注意

アナフィラキシーショックを引き起こす強い毒性をもっているのは、何れもハチだけではありません。ハチ以上によく見かける「ムカデ」にも強力な毒を持つ種類が存在していますので、十分注意してください。

お盆過ぎたら要注意 海の天敵クラゲ

クラゲはその見た目とは裏腹に、強い毒をもっているため、決してあなどれない存在です。万が一、刺されてしまったら...

- ①よく洗い流す
- ②触手などが残っていたらピンセットなどで丁寧に取り除く(二次被害を防ぐためゴム手袋などを着用)
- ③患部を冷やし毒のまわりを遅くするなどの処置が必要となります。(※ハチなどと同様、症状によっては異なる対処が必要となるので、できるだけ早く医療機関へ向かい適切な処置を受けてください)

虫やクラゲの毒は、処置を間違うと大事になりかねません。安全に夏を楽しむためにも、正しい予備知識をもち、万が一刺されたら、できるだけ早く医療機関を受診を心がけてください。

(監修:内科 高橋 泰)